



— 0

堂々と書かれる嘘。

堂々と流される嘘。

作詞・作曲、詩慧 編曲、ログログ

半分真実

半分……



歌手、詩慧は若者を中心に大人気である。

デビュー当初。つまり大学入学直後、詩慧の唄う歌は少々拙くもあるが創る歌詞は等身大で力強く、そして儂い、とても綺麗な歌で、そして見た目がかわいかった（これを本人に言うと顔が真っ赤になる。怒り半分照れ半分）。

4, 5, 6月と三ヶ月連続でリリースしたデビューシングルを含む三枚は瞬く間に口コミやネットで話題になった（そのころの某検索エンジンの検索ランキングは長い間一位だった）。着うたランキングでも上位に食い込み、徐々にメディア露出も多くなっていった。

9月にリリースしたファーストアルバム『彗星』はオルコン一位を獲得（ビッグタイトルと発売日が被らなかったことも功を奏した）。

今年の12月にはニューアルバム『流れない星々』を引っさげ初の全国ツアーが行われる。そして年を跨ぎ1月の最終日にはライブの聖地といわれる武道会館でのライブが待ち構えているというサクセスストーリーという階段を順調に駆け上がっている。

彼女、西香詩慧はインディーズバンド『あいまいみい』のギターとボーカル担当だ。……いや、担当していた。

高校一年生のとき、文化祭にバンドを組んでステージに出ようとした俺が誘ったのだ。中地 紀陽（チュウチ キヨウ）上松 仁檜（アゲマツ ジンゴ）下田 燐子（シモダ リンコ）、そして西香 詩慧（セイコウ シエ）の四人のバンド。

バンド結成時には肩に触れるか触れないか程度の長さの黒髪ストレートヘア、身長152cmと少々ちっこい声がきれいな唯の女子高生。中地紀陽の恋人。つまり俺の彼女。

大学入学前、高校三年生の夏。メンバー全員が進学希望であったため入試が終わるまで活動を休止しようと区切りのライブでのことだった。とある大きなレコード会社の新レーベルの立ち上げのアーティストとして白羽の矢が立ったのだった。

我がバンドのボーカル・西香詩慧に。話としては大学入学と同時にデビュー、と簡単なものだった。俺の親友でバンドのドラム担当、上松仁檜は判断は詩慧と、リーダーに任せると、詩慧の親友でバンドのキーボード担当、下田燐子は絶対に嫌だ!!と、当人の詩慧は唄うのは凄く好きで歌手は夢だ、大勢に唄を聞いてもらえる人になりたい、でも今のバンドが大事です。と。それでリーダーである俺に意見が聞きたいと。

正直なところ俺は今のままバンドを続けたかった。ずっと詩慧と一緒にいたかった。でも違う。と思った。輝ける人は輝くべきだと思った。結果としてはGOサイン。最短とまではいかないまでも、かなりの速度で“上”へ駆け上がっていったわけ。

で、後悔。

俺ミスったかも。結構つらいのですよ。もちろん詩慧の所為じゃない。誰の所為でもないと思う。でも、きついのですよ。結構がんばってみたんだけどな……

— 1

九月末日。数日前まで残暑が厳しく、秋など来ないのでは？とか思っていたけど、急に風が涼しくなり始めた、今日この頃。我らが大学。私立土目大学の秋学期が始まり、まだ一週間程。履修登録すらまだ始まっていない本日九月三十日。繰り返すが秋学期がスタートしてから一週間程。俺は未だ学内で詩慧のことを見かけてすらいない。大学の敷地が馬鹿みたいに広いことを差し引いても見かけることがないというのは、つまり大学に来ていないということ。そりゃそうだ。俺の右ポケットに在る携帯電話の受信ボックスに当分大学に行けないと詩慧からメールが来ているから。……でも、やっぱり視線が詩慧を探してしまう。

「おーい、ヨウー!!」

彷徨っていた視線を声のする方へ向けると、よく知るカップルが、こちらへ歩いてくる。

「よう、仁檜!!相変わらず燐子と一緒にか？そろそろ季節も秋らしくなって涼しくなってきたってのに、お暑いこって」

上松仁檜と下田燐子。燐子は高校の頃からの友達だ。仁檜に関しては幼稚園からの親友だったりする。

「うっさいわよ!!そういうアンタは一人寂しくご帰宅って？」

仁檜は身長が高くガタイもいい、筋骨隆々……とまではいかないが、かなり男らしい奴。燐子は小さい頃からピアノを習っていました。と聞こえはものすごくいいのだが性格が勝気な姉御肌って奴。二人とも同じバンドのメンバーだが今は無期限休止中。

「あーそーですよー。一人寂しく帰って店を開かにかいかなのですよー」

ボーカルの詩慧が抜けてから他のメンバーを探す気にもならず休止中。二年に進級してから進む方向の違いから受ける講義も被らなくなり、構内で会えば話すし、時々遊んだりもするが、高校の頃のように毎日バカな話をしてバカな事をやって、とはいかなくなっていった。それが大人になるってことなのかな？

「店は大丈夫なのか？おふくろさんも亡くなって、お前一人じゃ厳しくないか？」

「へーきへーき。常連の人たちも事情は知ってるし夕方からでも皆今まで通り店に来てくれるしな」

我が家の大黒柱は父親ではなく母親だった。父親は俺が幼い頃に交通事故で亡くなっただけだ。当時二歳の俺の記憶には残っておらず実感はないのだが。未亡人となった母親は女手一つで俺を育てつつ、父親の残した『チュウチ楽器店』を経営した。楽器店とは言うものの実際は販売しているものの大半はインディーズのCDだったりして、地域のインディーズバンドの人達から結構な人気を得ていたりしたおかげで店がつぶれるようなことはなく父親の事故での保険金なんかと併せると親一人子一人の生活としては厳しくはなかった。こうして大学にも行かせてもらっているわけだし。

……だが、母親も死んだ。

奇しくも父親と同じ交通事故で。七月十日。俺の誕生日の三日後に。さすがに二ヶ月も経てば気持ちの整理も、ある程度はついた。と思う。

「あんたは？陽、あんた自身は大丈夫なの？詩慧とも会えてないでしょ？」

「ん？あ、ああ……。しょうがないさ。今、詩慧は大事な時だからな。」

「だからってさ……。おばさんの葬儀にも出なかったし、あんたとも最近会ってないってのはどうなのよ!？」

「うるっさいな!!しかたないだろ!?詩慧はプロになったんだ!!親の死目にも立ち会えないっていうだろ?しかたないんだよ……。俺は平気だから。んじゃな!!」

少し逃げるように、また家に向かって歩き出す。



私立土目大学のとあるベンチに二人の男女が座っていた。

「ねえ、仁橋？陽は平気かな？」

「んー、正直なところ相当参ってると思う。強がっちゃいるけど色々と歯車が狂ってきてるよ。多分な。」

「そう、だよ。本当なら詩慧と一緒にいてあげなきゃ行けないのにね。」

「ああ、もっと陽は我俣言ったり、誰かに寄りかかったりしてもしてもいいと思うんだけどなー。陽は限界を超えても我慢するからな。」

「それに陽は自分で後押ししたから会えないことに対して泣き言を言いたくないんじゃない？詩慧も背中を押してくれた陽を信じ過ぎてると思うなあ。」

「ん、どーにもかみ合っていない二人だな。このまま別れちまったりするのかあ？」

「わかんない。詩慧は陽のこと大好きだし、会えるなら会いたいんじゃない？でも、会えなくても大丈夫って思ってるんじゃないかな？根拠なんてなくせに。」

「陽も詩慧のことは大好きだろ？でも、陽は詩慧に、すごく会いたいんじゃないか？だけど、そこで我慢しちゃう。もしかすると一緒にいてくれる良い女の子が出てきたら陽の気持ちは揺らいじまうかもな」

「詩慧には悪いけど、その方がいいかもね。ちょっと詩慧は勝手すぎたかも。確かに陽が詩慧のデビューの最後の一押しをしたけどさ。仕事と陽で比べて仕事を選んではいけないでしょ？いくら陽を信頼してても、しすぎるのは酷ってやつだよ。」

「そうだなー。とりあえずは今度、陽とメシでも行くかな。」

「そうだよ。話、聞いてあげなよ。幼馴染さん!!」

私立土目大学が在る駅から西に三つ先の駅の裏。木尾黒西駅に中地紀陽の家、『チュウチ楽器店』がヒツソリと確かに存在している。地上三階建ての小さいビルを丸ごと使用した店は一階の店舗、二階の倉庫、三階の生活スペースとなっており。そして。

地下一階、小規模だがしっかりとしたスタジオが存在する。そのスタジオの貸し出しでも定期的な収入を得ている。そんな中地家の唯一の住人、紀陽は、その地下一階。スタジオの隅で床に直に座ってアクアブルーのベースを抱いていた。

(は一……。)

友人の前では平気と言い張ってみたものの、そろそろ精神的にも肉体的にも限界だった。唯一の家族だった母親の死、それに伴う今まで母親が行ってきた店の業務、恋人とも会えない日々、そして嫌なことは重なるもので。大学の課題などは無い時は何も無いくせに出るときは出るもので、今が正にその時だった。結果、二人の友人が危惧した通りだった。

今も少し早く店を閉め、気分転換にベースでも弾こうと降りてきたものの、疲れからか床に座り込んでしまっていた。……が、嫌なことは重なるもので。

『びーんぽーん』

間抜けな音がスタジオに響く。基本的にはスタジオも家の一部であるためインターホンがつながっていた。だが、この中地家。来客などほぼありえない。チュウチ楽器店の来客ならありえるが、このインターホンは中地家としてのもの。確かに店舗のドアの横にインターホンは設置してあるがドアノブには閉店の札がかかっているはずだし、そもそも早く店を閉めたとはいえずに時刻は九時手前。客なんて来るはずがない。……はず。

『びーんぽーん』

グルグルと立ち上がりたくない言い訳をめぐらせているとまたしても間抜けな音が鳴り響く。

(は一……。行くか)

短時間に二度も溜息をつき大量に幸せを放出しつつ階段を上り店舗部分へ上がってみると三度目の間抜けな音が鳴ったところだった。

「ったく。はい!!どちらさま？」

鍵を開け扉を開くと、少し大きめのキャスケット、かなり大きめのサングラスを身にまとう女性（キャスケットから流れている肩に触れる程度の茶髪から推測。体のラインにあまり凹凸が無いための苦肉の策。）がそこにいた。

「あの、中地紀陽様はご在宅でしょうか？」

シンガーソングライター、鏡（キョウ）は現在の日本音楽シーンを引っ張るスター。今でも伝説として語り継がれるバンド『スタグス』のリーダーレイノルズを父に持ち、アイドルとして一時代を作り上げた北堂 璃依菜（ホクドウ リイナ）を母に持つ期待の新人として四年と半年ほど前にデビューして以来爆発的にCDを売り上げ一気に日本音楽界のトップランナーにのし上がった。親がどうかデビュー当初は野次られたりしたものの、ライブがあれば一般販売は開始一分で売りきれれるほど。そしてライブでひとたびバラードを唄えば泣き出すお客が続出、ロックナンバーを唄えば会場が揺れるほどお客が飛び跳ねる。と多彩な曲を作り出しギターはもちろんピアノでの弾き語りなどを披露したり、ダンサー顔負けのダンスを披露したりとマルチな才能をこれでもかと思わせる。先月リリースしたアルバムは未だにオルコンで一位である。まだ19歳と、とても若く将来がまだまだ楽しみなシンガーである。

……ってどっかのメディアで紹介されてた。

私、東那 鏡（トウナ カガミ）は少し普通じゃない家に生まれた。いや、少しどころではない。かなりスゴイ家だと思う。父は伝説的ロックバンドの天才ギタリスト、母は日本中の男性を虜にした国民的アイドル。普通じゃない。不満とかは無かったけど、やはり何をしても両親の名前が付いて回った。でも私は両親を誇りに思っていたし、あまり他人の評価なんてあまり気にしない性格だったこともあり、両親のビッグネームに潰されることはなかった。そして強制されたわけではないけど幼いころから歌が好きだったから、いつも父のギターで唄っていた。それが自然で、いつの間にか父と一緒に曲を書き、詩を書き。いろいろな楽器も演奏したギターを、ベースを、ピアノを、と。気がつけば天才と騒がれ、高校に進学すると同時にデビュー。一年もしないうちに忙しくなり芸能科に通っているとはいえ、ほとんど学校に通えなくなっていた。なんとか卒業はさせてもらったけど、青春とは言えない高校生活。でも、やっぱり不満とかはない。……はず。だって好きなことをしてるわけだし。大学への進学はもちろん不可能。行ってみたいとは思ってたけど、さすがに難しかった。勉強もできないし。だけど最近思う。詩を書いて、曲を書いて。みんなが歌を聞いて。やっぱり思う。人生の経験が少ないって。そりゃあ私まだ19歳だもの、人生まだまだよ？……でも少し行き詰ってるかも。



詩慧ちゃんに出会ったのは去年の夏だったはず。Mホーム（ミュージックホーム）という十年以上続く音楽番組の収録の日だった。収録前に彼女が挨拶に来た時。それ以来結構仲良くしている。

そんな詩慧ちゃんから先日、インディーズ時代のCDをもらったのが始まりだった。『名前を呼ぶから』という曲。

久しぶりに心が震えた気がした。私に無いモノを持っているような曲。いや、持っている人の曲。詩慧ちゃんに聞くと、中地紀陽という人が作詞作曲ともに担当したらしい。

最初は凄いと思った、次にズルイと思った、最後はもったいない。この中地紀陽という人は私が持ってないものを持っているのに私達と同じステージに上がってない。さらに聞けば、今は活動すらしていないと。凄く才能あふれるベーシストであると。自分に唄う楽しさを教えてくれた人だと。詩慧ちゃんの彼氏であると。家が今、大変であると。会いに行きたいけど時間がないと。電話やメールはするけど彼は表に出さない人だからと。

後半は私情があまりにも入りすぎていたが、なんとなく中地紀陽の事情が見えてきた気がする。つまりは家が大変で、詩慧ちゃんとも会えていないし、なおかつ歌手がいないと。

なら話は簡単じゃない？



「あの、中地紀陽様はご在宅でしょうか？」

会ってしまえばいい。私が行って仕事の依頼をすればいい。なんて名案だろうか。と思ったのが二時間ほど前。場所は詩慧ちゃんに聞けば一発だった。すぐさま詳しい地図を教えてくれた。

「えっと、中地紀陽は俺ですけど、何か御用ですか？」

「ええ。今、お時間はあるかしら？」

「あっと、は、はい？平気ですけど？」

「少しお話をしたいのだけれど、でもその前に中に入ってもいいかしら？」

閉店後とはいえ店先で話すようなことではない。これは正式なお仕事の依頼なんだから!!

店内の階段を三階まで上がると何故か玄関があった。どうやら三階部分が生活スペースらしい。けど玄関て？まあ、いいけど。

中に入ると見た感じ普通のマンションの部屋の様だった。三階部分が全て生活スペースなら結構な部屋数があるはずだろう。

「どうぞ、そこに座ってください。何か飲みますか？」

「じゃあ紅茶をくださる？というか、いいの？まだ名乗ってすらいないはずだけど」

「別に。聞くまでもないですし。鏡さんですよ？」

「えっ？ええ、正解。よくわかったわね？一応顔は隠してるはずだけど？」

失礼な話だけど、まだ私は帽子もサングラスも外していない。そこまでハッキリとわかるはずはないのだけど……

「そうですね。顔は全然わかりませんよ。でも声でわかりますよ。楽器屋の息子なものでして、耳は鍛えられてますよ。」

っ!?声？

「どーぞ。お茶ですが。」

「ちょっと!!そんなボケはどうでもいいのよ。声って？あんな少し話ただけで判断したの？」

「そうですよ。あなたの声は日本に生きてたら聞かない日は無いですからね。というか、どうでもいいって酷いですよ。これでもスーパースターが来たから凄くビックリ、そして緊張してるんですから。」

自慢じゃないが、そのとおりだと思う。けど普段喋る声と唄う声は絶対違うはずだし。さすがといったところだろうか？

「なんでビックリしたらボケるのよ!?緊張してたらボケらんないでしょ!?普通。というか詩慧ちゃんの彼氏でしょ。彼女だってスターだと思うけど？」

「詩慧は高校の頃から知ってるからですよ。自分の日常にいちいちビックリしてらんないですよ。っていうかお茶なのは間違っていないですし。」

「そこは普通粗茶ですが。でしょう!?まあいいわ。そんなことを話しにきたわけじゃないの。」

話し難いってわけじゃないけど、何故か調子が狂っちゃうなあ。何か不思議な人。

「で、話ってなんですか？詩慧のことですかね？鏡さんは俺と詩慧の事知ってるみたいですが。」

「え……。あ、ああ。今日は貴方に依頼をしたくてきたのよ。」

「依頼？注文とかじゃなくてですか？」

「ええ。貴方には私のチームに入って欲しいの。作曲家として。」

本来これはとても異例の話だ。私がデビュー以来唄ってきた歌は全て私が創った曲ばかりだ。他人に頼んだことなど一度もない。でも、私は彼——中地紀陽の曲に惹かれてしまった。創作活動に行き詰まり、誰かに頼りたかったのかもしれない。だけど、もう決めた。彼の音で唄うと。

「え、お断りします。」

彼も音楽家として少しでも活動していたのならプロに興味はあるはずだし、お店が大変というならギャラだって多めに払うし。断る理由は……

「ええー!!な、なんで!?ギャラだってはずむし、貴方の曲が日本全国でながされるのよ!？」

こ、困る。凄く困る。断られるとは思わなかった。

「いやー。ギャラとかじゃなくて。確かに俺の曲が多くの人に聞いてもらえたら嬉しいですし、何かを感じてもらえたら最良ですが。俺は、もう曲を書く気はないですし。このお話しはお断りします。」

「嫌よ。」

「は？」

「嫌よ。私には貴方の曲が必要なの。いや、貴方が必要なのよ。貴方の曲で唄うと決めたの。」

そう。中地紀陽が必要。もう私にはそれしか思い浮かばない。

「嫌って言われても……。そもそも、なんで俺なんですか？もっと凄い人なんていくらでもいるでしょう？第一、鏡さんはシンガーソングライターでしょう。自分で書いてくださいよ。」

「それが出来ればやってるわよ!!わからないのよ……。浮かばないの。何も。今までの曲は私の全て。等身大とか言われていたけど、それだけしか無いの。何かが足りないのよ。貴方の曲にはそれがある。『名前を呼ぶから』という曲を聴いたわ。作詞も担当したらしいわね。この曲には私に無いものが全て有る。他の人が創る曲とも違う。だから、お願い。貴方に曲を書いて欲しいの。」

もう、ダメ。これ以上の言葉は出てこない。恥ずかしいけど私の中のモノを全部吐き出した。いつもは、鏡として、みんなの憧れとして強くあろうとしてきた。弱音なんて吐いたりしないし、誰にも頼っていない。私は鏡。なんでか、わからないけど、この人の前でいつもの私が崩れた。

気がつくとは私は俯いて泣いていた。

「ご、ごめんなさい!?変な事言っちゃったわね。そろそろ帰るわ。今日の事は忘れていいから。」

涙をぬぐって立とうとすると彼が小さく溜息をついた。

「まって。鏡さんに足りないモノとか俺が持つてるモノとか他の作曲家と俺の違いとか全然わかんないですけど、とりあえず書いてみますよ。」

「えっ?う、うれしいけど急にどうして書いてくれる気になったの?」

「さあ?なんとなく。ただ鏡さんに唄ってもらいたい曲ができました。とりあえず詳しい話を聞かせてもらえますか?」



帰ってしまった。詳しい話を聞きたかったのに、何故か凄く慌てて今日は帰ると言い残しバタバタと去ってしまった。よく分からないけど、そのうちまた訪ねてくるだろうと勝手に考える。にしても。さっきの鏡さんはやばかった。似ていたのかもしれない。詩慧に。あの時の詩慧に。

とにかく少し前に進んでみよう。きっと何かがあるはずだから……

－ 0

帰ってきちゃった。

とりあえずは依頼を請けてもらえそうだ。まずはプロデューサーに連絡して話をまとめて、曲数を決めて、あとは彼と一緒に。

－ 1

依頼を請けてから数日。あれから連絡がないなあ。なんて考えてたら、来た。またしても本人が。

話を聞くに、鏡さんは現在アルバムを作成中らしい。だが、自分の曲が書けなくなったらしい。スランプってやつ？そこで詩慧からもらった俺の曲を聴いて依頼を思いつてたらしい。

しかし、今まで鏡さんは、ずっと本人が作詞作曲を担当していたこともありプロデューサーと打ち合わせで色々あったらしい（それが、この数日らしい）。で結論がこれ。

作詞作曲：キョウ

俺は“きょう”だが二人あわせてキョウということにするらしい。公式にはまだ俺の事は発表はしないらしいが。

らしいらしいらしいらしいらしいらしい。

つまりは俺が知らないところで勝手に話は進んでいようだ。らしい。

前に進もうと思ったが知らないうちに動く歩道に乗っていたようだ。

さらに日は進み十月八日。講義が終わり、大学から帰宅すると前回とは違うキャスケット、大きなサングラスで顔を隠した少女が店のドアに背中を預けて、つまらなそうに立っていた。

「こんにちは。ずいぶん早いですね、鏡さん。」

俯いていた少女は、バツ!!と顔を上げ少し頬を膨らませる。正直どこの子供だって思ったけど言うとな怒りそうなので黙っておこう。

「遅いわよ!!今日から行くって言ってあったでしょう!?何していたのよ!？」

「いや、時間までは聞いてなかったのだから大学行ってましたけど……」

俺も一応大学生なワケで。講義によっては出席を取る教授もいるのでなるべく欠席はしたくない。

「えっ? ああ!! そっか。大学生よね。ごめんなさい、少し自分勝手だったわ。店に来れば居るものだと思っていたわ。」

「まあ、あと二年もすればそうなりますよ。早速下に降りましょう。とりあえず二曲は出来上がっていますから。」

先日来たときに依頼の内容を聞かされた。製作中のアルバムは全14曲の予定でその内5曲はシングルから引っ張ってきて残りの9曲は新曲でいくらしい。さらにその内2曲は制作済みらしく、俺の仕事は残りの7曲を創ること。

そして、その作業はウチのスタジオで行うこととなった。さすがにプロのレコーディングまではできないまでも時間にとらわれず音を出す事ができる。不幸中の幸いというべきか今のところスタジオ使用の予約などは無かった為貸出の無期限停止をし創作活動の場所としている。

「もう!?早速聴かせて欲しいわ。早く降りましょう。」

店舗スペースの隅にある階段から地下のスタジオに降りる。

「はい、鏡さん。どうぞ。スコアです。」

早速スタジオに用意しておいた手書きのスコアを渡す。そして壁に立掛けていた作曲の時いつも使用するワインレッドのギター（レフティモデル）を手にとる。

「あら？キョウくんって左利き？」

「いえ、右利きですよ。これは詩慧が最初、練習用に使ってたモノです。まあ、元々二階の倉庫部分にしまってたんですけどね。というかキョウって……。」

「ふーん。器用なものねー。いいじゃない。キョウって呼びやすいし。なにより表記がキョウってなるのだからいいでしょ？」

「でも二人ともキョウってどうなんですか？」

とりあえず抵抗しながらもストラップを右肩に掛けアンプと繋ぐ。

「あら？二人じゃないわよ。キョウくんは私の事を鏡（カガミ）って呼べばいいのよ。敬語も禁止。同年じゃない。」

「カガミ？」

「ええ。私の本名。東那鏡って言うのよ。改めてよろしくね。キョウくん」

「へえ。わかりま……わかったよ。」

自然と敬語で喋ろうとしたら結構な鋭さで睨まれた。

「よろしい。二曲出来ているというのはアノ曲を入れて？」

「いや。アレは鏡と一緒にやった方がいいかと思って。」

タメ口もそうだけど呼び捨ても結構ハードル高いなあ。

それはともかく、アレとは依頼の内のひとつ。鏡による『名前を呼ぶから』のカバー曲の作成。それに伴う許可。一応すでにメンバーにも許可はとってある。詩慧からはメールの返信はきていないが……。忙しいのだろう。そう、無理やり納得する。まあ、作詞作曲は俺な訳だし、特に問題は無いはず。

出来ていた二曲のデモ演奏を終えると鏡は頷きながら黙りこんでしまった。

「ダメか？俺なりに鏡が唄うことを意識して創ったんだけど。」

「いいえ。凄くいい曲ね。聞き入ってしまったわ。曲に負けない、いい詩を創らないとね。」

「それなんだけど、俺はどうすればいい？作詞はノータッチの方がいいのか？」

「とんでも無い!!寧ろ貴方にメインで書いて欲しいくらいよ。今回の私はあくまで補助。唄うのがメインよ。」

は？

オレガメイン!?

「えーっと？俺がメイン？作曲だけじゃなくて？」

「ええ。勿論。言ったでしょう？私は貴方の創った歌が唄いたって。」

「言ってない!!第一、俺のこと作曲家としてって言ってたでしょう!？」

そうだそうだ!!思い出した!!確かに作曲家って言ってた。作曲家として必要だって。

「そんな事言ったかしら？いいじゃない？せっかくだから一緒に創りましょう？」

正直なところ鏡は凄くかわいい。一世代を築いたと言われるアイドルを母に、伝説とさえ呼ばれるバンドのリーダーを父に持つ少女。レイノルズは日本人と米国人のハーフである。つまり鏡はクォーターということになる。そんな少女に見つめられたら断れない俺を誰が責められようか？

「う、……わ、わかったよ。書くけどさ……正直あまり自信はないよ。」

「貴方はもっと自分に自信を持ってもいいはずよ。私は貴方の書いた曲と詩に惚れたのよ？それに演奏だってプロ顔負けじゃない。正直に話すと、そこらのプロのベーシスト何かよりずっと巧かったわよ。」

十一月十二日。都内某スタジオ。

詩慧は来月に控えた全国ツアーのリハーサルを行っていた。最初は人見知りということもあり、バンドメンバーともあまり打ち解けられていなかったが、回数をこなし今ではアイコンタクトをとれるようにまでなっていた。

だが、その代償と言ってはなんだが家には帰れていなかった。スタジオで徹夜とまではいかないまでも近くのホテルに泊まりっぱなしであった。

そして紀陽ともなかなか連絡を取れずにいた。今までは仕事が終わリケータイを開くと紀陽からのメールがよく着ていたが最近では、その回数も減り、今月に入ってから未だメールは着ていなかった。

それでも詩慧は紀陽を信じていた。信じすぎていた。

そして、その信頼は自身の安心にも繋がっていた。だが詩慧自身はその事には気づかずライブの成功を目指し前を向くだけであった。

そこにあるものが何かもわかっていないのに……

- 1、なまえをよんで 作詞作曲：キョウ
- 2、思い、想い。 作詞作曲：鏡
- 3、譲れないネガイ 作詞作曲：キョウ
- 4、distant arcadia 作詞作曲：鏡
- 5、矛盾 作詞作曲：キョウ
- 6、道標 作詞作曲：キョウ
- 7、ゲンソソニキス 作詞作曲：キョウ
- 8、雨 作詞作曲：鏡
- 9、deep mist 作詞作曲：鏡
- 10、アルカナ 作詞作曲：鏡
- 11、一番。 作詞作曲：キョウ
- 12、drive alive 作詞作曲：鏡
- 13、ソウルビースト 作詞作曲：鏡
- 14、なまえをよぶから 作詞作曲編曲：キョウ

『キョウ』。これが完成したアルバムのタイトル。最後の最後まで反対したけど結局押し切られてしまった

。

結局、二人で新曲を創り、『名前を呼ぶから』の編曲を終える頃には月が変わり秋というより冬になってしまっていた。

そして俺もスタジオに同行しての収録作業。唄う事に関しては鏡は完璧と言っていい程でケチの付けようの無い歌だった。本人曰く一緒に創った曲だから気持ちの込め方に今までとは変わらないらしい。

んで、聞いてなかった話しが一つ。アルバムを出すということでライブが有るとは思っていたが、既に決定していた。3月に東京都ドームで三日間連続でライブを行うらしい。そのメンバーに俺がベースとして入っていること。鏡は俺の演奏を気に入ってくれたけど実力はまだまだ。勿論断ろうと思った。思ったんだ。

けど、なんだか引き受けてしまった。思っていたのに、口からでたのは了承の言葉。

ライブは3月なので今のところは準備のしようが無いので今まで通りの生活を続けていた。一つを除いて。大学から帰ると店を開く。常連さん達がスタジオを使用したり、CDを買ったり。そこまでは今までの普通。特別はその後に鏡が来ること。しかも毎日のように。なんでも今のところは暇だそうで、なんでもない話しをして、唄って、帰って行く。

そして今日も。

夜の八時を過ぎれば店の常連さん達も皆帰り、そして店の中で一人、少女を待つのがいつの間にか普通になっていた。

鏡が来ると凄く楽しい。音楽の趣味は違うもののお互いのオススメを交換したり、今日あった事を喋ったり本当に何でも無い話しが凄く楽しい。鏡と出会うまでは立ち直った気でいたが、やっぱり少し落ち込んでいた。大学に行ってもつまらない毎日。仁橋達に弱音なんて吐いてらんないし。でも、鏡と出会って何かが変わったんだと思う。毎日が色鮮やかになった。大学であった面白い事、お客さんから聞いた話しとか鏡と話したくて。

鏡が来ないと寂しい。別に毎日来ると約束している訳でもないし、言っている訳でもない。仕事が忙しい日だってあるだろう。今の時期が結構暇と言ったって、鏡は絶大な人気を誇る歌手だ。音楽番組は勿論、バラエティ番組にだって出ている。でも、今まで鏡がいなかった生活が信じられない程つまらなく、寂しい。

最近では毎日、来るのか来ないのか、それが頭の中をグルグル回っている。そうだ今日来たらメアド交換し

よう。そうしたら少なくともこのモヤモヤは消えるはず!!



出来た!!出来た出来た出来た!!

いつもより少し遅れてしまったけど早く届けに行こう。

毎回CDが出来上がるたびにワクワクする。けど今回は桁が違う!!初めてかもしれない。こんなにも嬉しくてしょうがないのは。早く彼に渡したい。きっと凄く喜んでくれるに違いない。話したい事がたくさん有る。

先程、完成したアルバムを受け取った時、いち早く彼に連絡したかったけど、そういえば私は彼の電話番号もメールアドレスも知らない事に気がついた。一ヶ月近く一緒にいながらも、そんな事も知らない自分に少し落胆した。でも聞けばいい。そうだ。あとで聞けばいい。そうと分かれば、こうしてはいられない!!

先程から全然進まないタクシーから料金を払って降りる。ここからなら走って辿り着けない距離ではないはずだ。

さあ、早く彼に会いに行こう。

- 2

時刻は九時を回った頃。『チュウチ楽器店』のドアには“閉店”の札が掛かっているにもかかわらず鍵は掛かっていなかった。無用心な事かもしれないが、カウンターにまだ若い店主が座っていることを踏まえると、そうでもないのかもしれない。

若い店主、紀陽は来るかも分からない少女を待っていた。だが、この時刻になっても未だに現れないとなると待ち人が来る望みは薄いだろう。

溜息を一つ。重い腰を上げ完全に店を閉めようと立ち上がると勢い良く店のドアが開いた。

待ち人、鏡かと思ひ顔を輝かせるが、その顔は一瞬で驚愕の色に変わる。

確かに待ち人であった。来るはずもなく、もはや望みすら消えかけていた、可能性すら微塵も考えていなかった。本来、自分が待っていなければいけない存在。

「陽くん!!」

「詩慧!？」



(なんでだろう……)

(すごく楽しみにだったのに……)

すっかり寒くなった夜空に吐息を白く濁らせ鏡は走っていた。あと一つ角を曲がれば目的地、『チュウチ楽器店』はすぐそこだった。

走っていた速度を落とし息を整えながら角を曲がる。そこには鏡より一足早く楽器店のドアの前に立つ少女がいた。

「詩慧ちゃん……!!」

確かに驚いた鏡であったが、考えてみれば、それは至極当然。

なぜ詩慧がここにいるのか？彼女が彼氏に会うのに理由があるのか？

寧ろ自分がここにいる事の方が不自然ではないか。

先程までとは、まるで別人のような少女がそこにいた。

内からこみ上げて来る感情を隠そうともせず、もはや恋心と言ってもいい想いを抱いていた少女。

内からこみ上げて来る感情を抑えきれず、自身でも信じられない程に心が重くなっている少女。

グチャグチャな思考をどうにかまとめようと鏡が悪戦苦闘していると、詩慧が早くも『チュウチ楽器店』から出てきた。まだ店に入ってから五分と経っていないはずだが、事実、詩慧は店から出た後大通りの方へ小走りで行ってしまった。

(えっ??)

まだ頭の中がまとまっていなまま状況が進んでいく。鏡はとにかく元の目的通り店に足を向けた。



ずっと鏡を待っていた俺としては急の来店者に戸惑いと後ろめたさが渦巻いていた。

「こんばんは!!陽くん。きちやった。」

いつも通りの詩慧。いつも通りではない俺。

「きちやった。じゃねえだろー。急すぎんだよ、メールも電話もしないで。」

「ゴメンゴメン。もう一つごめん。陽くんの誕生日以来だね。お婆さんの葬儀出られなかったし、大学にも最近は行けてない。最近はずっと会えてない。ごめん……」

少し軽かった口調が尻すぼみに重くなる。

「母さんの葬儀の時は急だったからな。仕方ないよ。俺の誕生日の時は何ヶ月も前から休みを作る為に頑張ってくれたんだろ？最近の事だって、詩慧が頑張ってる証拠だろ？確かに寂しいけどさ、けど大丈夫!!だから、もう謝んなって。」

電話やメールで何度も繰り返したやりとり。幾度となく謝り、赦す。もはや中身の無い会話。これが俺が最近詩慧と連絡を積極的にしない理由の一つだった。確かに詩慧からしたら何度謝っても足りないのかもしれない。けど、謝られる側としては、そろそろ気が減入ってきていた。

「うん。そうだね。ありがとう。」

「で、どうしたんだ。急に暇になったってわけじゃないだろう？何かあったか？」

「そうそう!!さっきまで近くでお仕事があってね、移動の途中でよらせてもらったの。今日は直接渡したいモノがあって。ハイこれ。」

言いながら渡してきたものは水色の封筒。

「手紙？」

「うーん、半分正解。もう半分はチケットだよ。一月のライブの。」

「あー、武道会館での。そっか、詩慧もあそこでライブやるようになったんだな……」

なんか今更だけど遠いな。今まで距離が近かった分、遠くなると本当に遠い。

「えへへっ。本当はZIPPU東京が最終日だったんだけど追加公演でまさかの武道会館だよー!!夢みたい!!」

実際、夢だった。俺らのバンド『あいまいみい』の。でも詩慧は一人で行ってしまった。

「夢が叶ったって事だろ？次は目指せ紅白歌大戦ってか？」

「あはは、でも、唄ってるからには出てみたいよー。そういえば鏡ちゃんの依頼請けたんだって？」

「ああ。詩慧がCD渡してくれたんだって？お陰で毎日が忙しかったよ。」

別に大変だとかは思っちゃいないけど少し皮肉っぽく言うてるが詩慧は気づいた風もなく。

「楽しかったでしょ？鏡ちゃん優しいし面白いし。一緒にいると楽しいでしょ。」

「お陰さまで退屈な毎日が吹っ飛んだよ……」

『君を思い出したら、きっと名前を呼ぶから♪』

詩慧の携帯から『あいまいみい』の曲が流れる。

「ごめん!!次のお仕事があるから行かなきゃ。」

どうやらマネージャーからの連絡らしい。

「えっ？もうか。売れっ子は大変だねー。」

「そんなんじゃないよー。まだまだ安定してないからねー」

「んじゃ、またな。」

「うん!!まったねー!!」

行っちゃった。随分とあっさりしてたな、と思うのは間違いじゃ無いはずだ。どうにも寂しい

「こんばんは一!!」

気持ちの整理がついていないのに、またしても、らいきや……

「鏡!!」

鏡が来た。いつもより遅い時間だが、来た。

「ちょっと遅れちゃったけど、今日は重大発表がありまーす!!」

詩慧が来た驚きよりも鏡が来た喜びの方が大きいことに衝撃を受けつつ、ちょっと違和感に気付く。

「ん？重大発表？そんなにテンション上がることか？」

いつもよりも鏡のテンションが高い気がする。変な感じに。

「上がるわよ？だってやっと出来たんだもの。その所為で今日は少し遅れてしまったのよ。」

「出来た？もしかして!？」

「そうよ!!アルバムが完成したのよ!!」

— 3

楽しかった。やっぱりキョウ君と居ると凄く楽しい。

詩慧ちゃんがいた時は凄く心が重く感じたけど、彼の顔を見たら全部が飛んでいった。

結局いつもどおり楽しんで、喋って、唄って。

彼も予想以上にアルバムの完成を喜んでくれた。一緒に聴いて、一緒にはしゃいで、一緒に喜んだ。

キョウ君と会うと元気になれる。

キョウ君と会うと胸が高鳴る。

凄く、凄くドキドキする。

これが、きっと。

これこそが、きっと……

－ 0

12月。一年の終わり。結果から言うと、クリスマス、詩慧は福岡にいた。当然俺と聖夜を過ごせるわけもなく日にちは過ぎていく。

机の上には渡せるはずも無かったプレゼントが、二つ……。

－ 1

12月28日。

「で、最近は何と会えてんのか？」

「んー、この前店に来たけど。五分ぐらいだけど……」

「五分!?みっじか!!何しに来たんだよ？」

「チケット渡しに。後、手紙くれた。」

「武道会館のか。手紙はなんて？」

「ごめんなさいのロング版。」

「詩慧らしいっちゃらしいけど、欲しくは無いな。」

「ああ。手紙もらった時は嬉しかったけど読んだら萎えたよ。」

「会った時は何話したん？五分で手紙だけじゃないだろ？」

「ごめんなさいのミドル版とありがとのショート版。」

「うっ……。ちょっとキツイな。久しぶりに恋人が会ったってのに、ごめんとありがとだけか。」

「うん……」

「なあ、陽。お前は どう 思って んだ？ 詩慧の事」

「どう いう こと？」

「いや、彼女 として。」

「確かに 寂しい けど、詩慧は 俺の 彼女 だよ。」

「じゃあ、質問 を 変える。今 世界で 一番 好きな 女は 詩慧 かな？」

「えっ？」

「ほら。高校 の 頃 の お前 なら 即答 だった。今 は 違う んだろ？」

「い、いや……」

「お前は 我慢 し ちまう から 詩慧 は 気づ かない で お前 を 信じ ちまう。お前 が 悪い と は 言わ ない けど さ、もっ と 我俣 言っ て も いい ん じや ない かな？ もっ と 誰か を 頼っ て も いい ん じや ない かな？」

「仁檜 には 関係 ない だろ!! これ は 俺 の 問題 だ!!」

「ある よ。紀陽。お前 は 俺 の 大切 な 親友 だ。んで 俺 は お前 の 親友 だろ？ ほら、関係 大 あり だ。俺 は お前 に 幸せ に なっ て 欲 しい。お前 が 別 の 女性 を 好き に なっ た っ て 応援 する よ。結果、詩慧 と 別 れ て 他 の 女性 と 恋人 に なっ た っ て 祝福 する よ。」

「仁檜……。俺……。」

「燐子 は 少 少 悲 しみ かも しん ない けど、認 め る と 思 っ う よ。燐子 は 詩慧 の 親友 だ けど、お前 の 事 も 大 好き だ から。」

「俺 さ、最近 と ある アルバム 制作 に 関 わ っ た んだ。この 前 少 少 話 し た だろ？ その 唄 っ て る 子 の 事 が 気 に な っ て る んだ。よく 店 に も 来 て くれる。楽 しい んだ。会 っ て、喋 っ て、唄 っ て。凄 しく。最近、詩慧 と 会 い た い っ て、あ まり 思 わ なく な っ ちや っ た んだ。それが 凄 しく ダメ な 気 が して、詩慧 を 裏 切 っ て る 気 が して……」

「紀陽。その子の事が好きか？」

「うん。」

「詩慧より？」

「たぶん、いや、俺は鏡の事が好きなんだ。」

「じゃあいいんじゃないの。好きならそれで。人の気持ちなんて永遠じゃねえし。詩慧だって前はお前にベツタリだったのに今は一人でドンドン進んでる。付き合っ、別れて、そんなのありふれたモノじゃん。」

「でもさ……」

「お前が決めるよ。それこそお前の問題だ。」

「さっき、お前の問題は俺の問題って言ってたじゃん!!」

「ジャイアニズム!? そういえば鏡、だっけ? その子のアルバムはいつ出るん？」

「明日。明日ビルレコードにでも行けば一番前にデカデカと並べられてるよ。」

「は？」

— 2

12月29日。

とうとう発売。すぐにキョウ君に会いに行きたいけどアルバム発売のイベントや宣伝、さらには年末進行でスケジュールが過密過ぎる。歌大戦が終わるまでは会いには行けそうもない。

でも、お正月はお休みを貰えるからキョウ君と一緒にいよう。詳しくは聞いて無いけど、キョウ君のご両親は既に他界しているらしい。一緒にお正月を過ごして、最後にはきちんと話そう。この気持ちを。

12月31日。

一年が終わる。仁檜と燐子からお参りの誘いが来たけど二人の時間を邪魔するほど野暮な俺ではない。

でも、少し後悔。一年の終わりに一人寂しくコタツでみかんを食べつつ特番を見ているなんて結構辛いものである。いや、確かに定番スタイルだけども……。テレビでは先程まで大晦日の定番紅白歌大戦で鏡が笑顔を振りまいていた。今年は数年ぶりに紅組が勝利していた。

やっぱり鏡は凄い。司会の人には周りに遠慮しがちだったが遠まわしに紅組の勝利は鏡のお陰だろう。話していると凄く身近な気がするけど現実には凄く遠い。

『ぴーんぽーん』

なんかデジャヴ。

一階に降りてドアを開けると、先程テレビの中で光を振り撒いていた、遠くにいた少女がいた。

「一人寂しいキョウ君にサプライズ!!さあさあ、寒いから早く中にはいろう。」

「えっ?え?え?」

流されるがままに三階へ上がり、とりあえずコタツへ。

「ちゃんと聴いてくれた？私の唄。」

「聴いてたよ。凄かった。紅組の勝利おめでとう。」

「ふふ、うれしいわ。凄く。アルバムの評価も凄くいいのよ。プロデューサーも凄く褒めていたわ。」

「まじで!?それ、すごくうれしい!!」

「本当よ。年末に発売したのに売れ行きも凄くいいみたいだし。オルコンデイリーは勿論一位!!」

「まあ、それは鏡の影響力が大きいよ。」

「いいえ、貴方のお陰よ。私だけじゃアルバムは完成しなかったわ。」

「いや、鏡だよ。」

「いえ、キョウ君よ。」

「んー。まあいいや。で、今日は遊びに来たの？」

「ええ、そうよ。都合が悪かったかしら？」

「いやいや。とんでも無いよ。一人寂しかったから凄くうれしいよ。でもさ、てっきり鏡は疲れてると思ったから今日はさすがに来ないと思ってたからさ。」

「来るに決まっているじゃない。最近会えて無かったから……。やっと時間が空いたのだから会いに来るに決まっているじゃない。」

「あ、ありがと……。」

「ち、違うのよ。いや違わないけど……。」

顔を真っ赤にして鏡は俯いてしまった。勢いで色々言うくせに言った後がなあ。

「でも、もう年が変わるけど、お参りとか行きますか？」

「ううん。お家で一緒にいたいわ。キョウ君とお話したい……。」

「えっ!?う、うん。」

どうしよう。凄くドキドキする。顔は真っ赤なままだけど、凄く真剣な顔な鏡。仁橋と話した時に決めた事が有るけど、こんな急な展開だと口が開かない。

「私ね。」

俺がグズグズしていると鏡の話しが始まってしまった。

「私、ね。高校に入ってすぐにデビューしたの。それで徐々に色々な人に歌を聴いて貰えるようになって、忙しくなって。二年生になる頃には完全に学校には通えなくなっていたわ。でも辛くは無かったの。その頃の私は歌で出来ていたから。人に歌を聴いて貰えるだけで幸せだったの。でも、ね。その代わりに知らない事が他の人に比べて多いの。勉強は勿論、学生の流行、常識、そして人を本気で好きって言える気持ち。」

俺に聞かせるというより、寧ろ独白。

「多分、私に足りなかったモノ。それは普通に生きていれば手にするモノ。普遍でいて非凡。」

寧ろ……。

「でも、私にとっての普通は、普通じゃなかったから。でも、でもね。私もわかったの。」

寧ろ、

「私は、貴方が好き。キョウ君が大好きです。」

告白。

何も言葉が出てこない。決意した想いすら、決心の言葉すら出てこない。

「わかってはいるの。貴方には詩慧ちゃんがいる。こんな事言っただって意味が無いことぐらい。でも、言わずにはられないの。自分の気持ちに正直にいたいから。自分勝手な我侭だけど、どうしても言いたかったの……。ごめんなさい。」

何も言えない。けど体だけは動いた。

何も言えないけど、好きな人を抱きしめるぐらいは出来る。

「えっ？え？え？ちょっとキョウ君？」

「好き。好きだ。」

掠れて、震えて、とてもじゃないけどカッコの付かない言葉。

「俺は鏡が大好きだ。」

最初の恋が最後の恋なわけが無い。

初めての恋人が結婚相手の人ばかりじゃない。

変わらないモノなんてどこにも無いの……？

－ 1

一月。

年が明け、新たな年が始まる。

お正月。皆がうかれ、楽しい季節。

そんな中、詩慧はライブのリハを行っているだろう。夢の為にお正月返上で頑張っているだろう。俺は隣に眠る鏡の頭を抱き寄せて思う。

これは裏切りなのかもしれない。でも、どんなに罵られてもいい。殴られたって、蹴られたって。構わない。鏡がいてくれる。俺は鏡を守る。凄く強く見えていて、実は凄く脆い少女。

－ 2

1月16日。日曜日。

とうとうやって来た。憧れの武道会館!!

追加公演が決まった時は本当に涙がこぼれた。今まで自分が走って来た道が間違っただけで無かったと言われた気がする。

陽くんを信じて、待っていてくれると信じて走って来た。このライブが終わったら、お休みが貰えるから、ずっと陽くんと一緒にいよう。今まで出来なかった事をしよう。

でも、その前に最高のパフォーマンスを魅せよう。話しはそれからだよ。



武道会館。十段上駅から徒歩二分ぐらいの場所にある、ライブの聖地とまで言われるステージ

。

ライブ前には会うわけにはいかない。ライブ後に全てを話そう。覚悟は決まった。泣かれるかもしれない。怒鳴られるかもしれない。でも、俺の気持ちは……

— 3

武道会館。約二万人を収容する客席。それが余す所無く埋まっている。

一階のアリーナ。最前席。ど真ん中。詩慧はとんでも無い席を用意してくれた。何か周りのファンの皆様に申し訳無く思ってしまう。普通ならこういう場合、関係者席とかのはずだが、詩慧は最前列を用意してくれた。

鏡は関係者席にいるらしいが、ここからでは存在は確認できない。

「きたよーー!!ライブの聖地!!ブドーカイカン!!!!」

『♪♪♪』

とうとう始まった詩慧のライブ。周りのファンの人達は待ってましたと、初っ端からテンションは最高潮。

もはや会場が爆発するのでは、と不安になるほどの盛り上がり具合だった。

そこで俺は、詩慧の凄さを再認識した。自分の愚かさとともに。



ライブは4時間を超える長丁場となった。最後のダブルアンコールを終える頃には九時半を過ぎていた。

ステージを去った詩慧に対する歓声は未だ鳴り止まず、これから別れ話を切り出す相手だが素直に嬉しく思った。

そう、詩慧を嫌いになったわけじゃない、って言ったら言い訳がましく聞こえるかもしれないが、事実だ。詩慧の事は、寧ろ好きだ。だけど、俺は鏡の事を好きになった。それだけの話しだ。

最低の男かもしれないが、俺は鏡を選ぶ。



ライブ終了後、スタッフの人に詩慧の楽屋へ連れて行ってもらった。

楽屋に入ると大量の汗をかき、凄く興奮した詩慧がいた。

「陽くん!!観ててくれた?私のライブ。」

「ああ。凄かったよ。ってか、ちょいちょい俺の事視界に入ってたろ？」

「うん!!凄く元気をもたらったよ!!」

これから話す事を考えると詩慧の笑顔を直視する事ができない。

「話しがあるんだけどいいか？」

迷っちゃダメだ。覚悟は決めたはずだろ!!

「うん?いいよ。」

だが、俺の決意は儂く崩れ去る。

「でも、その前に私も話しがあるのだけれど。」

鏡が楽屋に入って来た。詩慧と話しをするのは鏡にも伝えてあるはずなのに。

「鏡ちゃん!!来てくれたの?!うれしい!!どうだった?私のライブ？」

「ええ。凄くいいライブだったわ。私もうかうかしてられないわ。」

「またまたー!!鏡ちゃんと比べたら私なんてまだまだ半人前だよー。」

「そんな事ないわ。貴方はもう立派な一人前の歌手よ。」

鏡の様子がおかしい。顔も笑っているし、会話もいつも通り、だけど。

「で？お話って何？」

「ええ。大事なお話なの。」

楽屋の空気が一変した。楽屋内にいたスタッフ達がソロソロと部屋を出て行く。残ったのは俺たち三人のみ。

「単刀直入に言うわ。私、中地紀陽くんが好き。」

「……………え？」

詩慧が固まる。予想など出来るはずの無いセリフ。考えに無い出来事。人の思考回路を停止させるには十分過ぎる内容だった。

「詩慧、ごめん。」

何も言えない詩慧に追い打ちをかけるように俺の口が動く。

「俺は、もう詩慧のことを一番好きって言えない。」

「鏡の事を好きになったから。」

詩慧の表情が歪む。悲しみに。絶望に。覚悟はしていたけど、実際に目の前にすると結構クル。辛いとか言う権利は俺には無い。だから自分の責任をもって受け止める。

「どんなに罵ってくれても構わない。俺がしている事は、どう正当化しても裏切りでしか無いから。」

詩慧からの言葉を待つ静寂。

「……出てって。お願い。これ以上陽くんの顔見ると泣いちゃいそうだよ……。だからお願い……」

詩慧は涙をこらえていた。おそらくは誰にも迷惑をかけないように……。

「さよなら……」

俺と鏡が楽屋を出る直前に小さく詩慧がつぶやいた。

「さよなら。」

数日後、詩慧からメールが一通届いた。いつもと同じような内容。ごめんなさいのメール。

そして、今までの思い出。

最後に又ごめんと。

“ごめんね。陽くん。私はいつも陽くんを頼ってた。デビューする前も、する時も、した後も。ずーっと陽くんを頼って、頼りすぎていたね。デビューするときも最後の決定を陽くんに任せて、背中を押された気になった。私が押し付けてただけなのにね。デビューした後も会わなくても大丈夫だって思ってた。でも違ったんだよね。ごめんね。私が自分勝手だったかも。でもこれからも友達ではいてほしいな……”

3月。まだ、あれから詩慧とは連絡をとっていない。

時間は過ぎるもので、今度は鏡の番。東京都ドームでの三日間のライブ。

2月から始まっているリハーサルを重ね、バンドメンバーとも仲良くなり、息も合い、後は本番のみとなった。



最初のステージはバカみたいに緊張した。今までの人生のなかで大勢の前に出たのなんて五百人が限界だ。それが今回は八万人を超える。人生初もいいところ。舞い上がっていたんだろう。緊張はするが、こんなデカイ場所で演奏出来る機会なんてそうそう無い。楽しんだ者勝ちだ。と思っていた。

だから気付かなかった。

鏡の考えに……

それは、三日目の最終日。

アンコールの時だった。一曲唄った後のMC。

「みんなー!!アンコールありがとー!!」

「今日は皆に重大な発表があります。」

会場がワァーと盛り上がる。しかし、バンドメンバー、舞台袖のスタッフやプロデューサー達がどよめく。

「まず、一つ目は、今回の作詞作曲を担当したキョウについて。皆は私の名前の表記を変えただけって思っているかもしれないけど、違うよ。いや、半分正解かな。キョウは二人で一人なの。もう一人がベースの紀陽くん。」

今度は会場がどよめく。今回からの参加の一バンドメンバーが急に紹介されたら、そりゃあどよめくよ。というか俺が内心メチャクチャ動揺している。こんな話するなんて聞いてない。

「彼が新曲の作曲を全て担当してくれて作詞も私と一緒に担当してくれたのよ。はい、拍手ー!!」

観客はとりあえずといった形で拍手が起こる。

「二つ目、これは皆にとっては嬉しく無い事だと思うけど落ち着いて聞いてね。」

「私、引退します。」

－ 3

あの時は世間が揺れた。

会場は大騒ぎになったが、治めたのも張本人だった。

鏡が泣いていた。静かに、静かに。

それを見たファンの人達は一斉に静まりかえった。

そこからは鏡の独白だった。最後に鏡はこう締めくくった。

「私に無かったモノを見つけました。私はソレを大切にしたいです。ごめんなさい。今までありがとうございました。」

と。

結局、キョウとして作詞作曲の仕事は続ける事となっけど、鏡は普通の生活を手に入れた。

そして————

— 4

二年後。

西香 詩慧。あれから、ずっと走り続け今や現役ナンバーワンの名を欲しいがままにする歌手へと成長した。大学は三年に上がる前に自主退学しその時紀陽と和解？今でも友達として仲良くしている。とある音楽プロデューサーとの噂が週刊誌等で囁かれていたり。と話題性も豊富だが人気は未だ衰えず。

上松 仁檜、燐子。大学を卒業後、結婚。仁檜の実家の不動産屋を継ぐ。数年後、木尾黒市近辺のライブハウスを騒がすキーボードとドラムの二人組『リンゴ』が結成されるのはまだまだ先の事。

東那 鏡、改め中地 鏡。紀陽が在学中は同姓しながら楽器店の店番をして生活していたが卒業後は紀陽と結婚し二人でキョウとしての活動をしながら楽器店の看板女将？となっている。

中地 紀陽。大学在学中は意欲的に経営学を学び、卒業後は鏡と二人仲良く楽器店を経営中。鏡と二人で創った曲で詩慧がミリオンを達成するまで後わずか。鏡の最後のアルバムとしてある意味伝説的な位置として『なまえをよんで』と『なまえをよぶから』は多くの人から愛され、キョウの名前は一時期騒がれたが二年も経てばすっかり収まり、静かに平和な毎日を送っている。

あとがき

どうも、糸、です。

今回の作品は未完成です。

タイトルにもある通り暫定版です。

何を隠そう、ワタクシ糸、は大学三年生でして。

とある授業で電子書籍を創ることとなりまして、しかもソレを知ったのが提出の二週間前。

ワタクシ糸、は、いつもはとある携帯小説でちょこちょこ稚拙な文章を綴っているものなのですが

流石に急遽な話しでして、既存の作品を終わらせるつもりも無かったので、新作を創ろうと思いついたのです。

しかし、頭の中にあった唯一の設定は。

A君とBさんが付き合っていて、最近はすれ違いが多いです。

そこにCさんが現れ、A君を好きになり、A君もCさんを好きになり付き合いだすというだけ。

授業中に全力で脳みそを働かせ設定を組み上げ、名前を決めました。

名前は見ての通り、某果汁100%の設定を少々マネさせて頂きました。

残りは電車の中で組み上げたのですが、

どうにもこうにも上手く短編にまとまらず三日ほど無駄にしましたが.....

そこで糸、は考えました。

じゃあいっそ省こう。

と。

あとがき 2

ストーリーを省き、山無し谷無し、平坦ストーリー。

名づけて『滑走路ストーリー』!!!!

ご都合主義ですが、なにか？

そこからはある程度楽になりまして、ツラツラと駄文を書き連ねていきました。

そこで、あることを思いついたわけです。

七章七頁を。

凄くどうでもいいかもしれませんがちょっとしたこだわりです。

先にも書きましたが、この作品は暫定短縮版です。

あくまでも、それは授業の為なのです。

今は学校生活がバタバタしているので無理ですが、いつかは完全版で完結させたいものです。

きちんとキャラクターを全員登場させて、省いたストーリーも全部載せて。

ところで読んでいただいた方なら、おわかりになられるかも知れませんが、東と西以外にも短縮版に北が登場しています。完全版には時空をねじ曲げ登場する予定ではいます。

いつかは『なまえをよんで』と『なまえをよぶから』の詩もきちんと熟考して載せたいものです。

それではここいらで筆を置かせていただこうかと思えます。

読んでくださった皆様に感謝を込めて。

本文 7月3日～7月16日
あとがき 7月17日深夜一時三十九分